

ああ、相談業務

～太一くんの話～

5

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

太一くん家族

太一くん（以下本児）は中学 2 年生で、父親 40 歳との父子家庭であった。父親は日雇いのような仕事をしていて、低所得で生活困窮の状態であった。家は小さな平屋の貸家である。実母は本児が幼児期に失踪。父方祖父母、母方祖母とも遠方に住んでいて関係が薄く、本児を引き取ることはなく、父親が一人で育ててきた。当時は母子家庭と違って父子家庭への支援は少なかった。父親自身行政に頼ることは無かった。

相談が始まる

本児の相談が学校から上がってきたのは秋も深まりつつある時期の事だった。不登校であ

る。中学校 1 年の時から、学校にほとんど来ていない子がいて、担任が家庭訪問するが、父親にも会えず、本児も出てこないため困っている。相談員の方で関わってもらえないかということであった。担任が行っても会えない状況で、相談員が行って会えるのかという疑問が湧いたが、まずは訪問を試みることにした。

日中は本児だけのはず。平屋の小さな家の玄関は引き戸。玄関ベルを押すが反応がない。大体そういうものだ。電池が切れてから交換されないため、玄関ベルは鳴らない。引き戸を叩いて声を掛けてみるが反応がない。これは想定内の事。手紙をあらかじめ書いてきていたので、それを引き戸の隙間に挟んで帰る。手紙には自己紹介と、何かお手伝いできることがないかということ、連絡先、又尋ねる事などを書いてある。

あまりすぐに再訪しても嫌がられるので、こ

こは少し時間を取り、10日後に又尋ねた。再び日中の時間帯に行く。夜行けばよいと思うかも知れないが、先ずは本児と繋がれるかを確認するために、前回より少し遅い夕方の時間帯に尋ね、同様の対応をして、手紙には今度は夜来ますと書いておいてくる。そして三度目は夜の時間帯。夜に尋ねる。もしかしたら父親がいるだろうし、暗くなってから行くと明かりで人がいるかどうか分かる。

二度目の訪問からまた10日ほどたったある日の夜7時半ごろに行ってみると、奥の電気が点いているのが玄関越しに見える。玄関ベルが鳴らないのはわかっているので、最初から戸を叩き、声を掛ける。何度か「市の相談員の河岸です」と声を掛けてみると、何度目かの声掛けで「はい」と返事がした。が、まだ戸は開けてくれない。訪問の事情を話し、本児の事で来ているとわかったからか父親が戸を開けてくれた、と言うより鍵はかかっておらず、「どうぞ」と言われた。

「失礼します」と戸を開けて入ると、玄関にはつっかけと、かかとを踏み潰した運動靴等数足が脱ぎ散らかされていた。綺麗とは言わないが、そこまで酷くもなく、まあ、男所帯ではこんなものかというレベルの玄関であった。

出迎えてくれた父親は無精ひげが少し出ている、浅黒い肌のほっそりした人で、薄いグレーの作業着姿であった。

挨拶をし、本児の不登校の事で学校から相談があったこと、出来れば本児との面談をしたいという話をした。また、家族のことなどを父親から聞き取った。父親の仕事も不安定であること、腰の調子が悪いという話も聞いた。父親自身、本児が学校に行けていないことは知っていたが、声は掛けているという。ただ本児が行きたがらないので仕方ないと思っていると話してくれた。本児との面談については、関

わってもらって構わないということで、本児に声を掛けてくれた。本児はしびしびという感じで玄関まで出てきてくれた。細くて元気のない、大人しい感じの子であった。

本児に自己紹介し、家で何しているのかとか、簡単な質問をするが、余り答えず、首を少し降るくらいで反応が薄い。それでもまあまあご飯は食べていることや、テレビを観たり、漫画を読んだりしていることは分かった。初めて会ったのだから緊張しているのもあるだろう。何度か訪問して関係性を築く必要があると感じたので、又来るけど会ってくれるかなと聞くと、一応うなずいてくれたので、日時を決め、あまり長居をしても嫌がられるので、15分ほど話して失礼した。

父親が本児と会わせてくれたのは予想外ではあった。大抵は本人と会えず、何回もトライすることになる。一回目で会えたのは良い傾向と思った。父親もきっと動かない息子に困っていたのだろうなどと思ったりしていた。

数日後、約束時間であった13時に尋ねた。出てきてくれるか心配だったが、待っていたのか、直ぐに出てきてくれた。これも想定外だった。大抵は約束しても、すっぽかされたり、居留守を使われたりするものだ。それも覚悟しての訪問だったので、余りにもすんなり行ってびっくりしたのだ。父親は留守だった。

前回は夜で薄暗かったこともあり、顔色なども良く見えなかったし、声もあまり聞けなかった。父親の前ではあまり話せなかったのか。今回は、日中でもあり、顔色もはっきり見えた。服はジャージなのか、パジャマなのかかわからないものを着ていて、部屋の中にあげてくれた。ダイニングキッチンと思われる部屋は、少し雑然とはしていたが、物が少なく、寂しい感じであった。台所に昼を食べた後と思われるカップ

麺の殻が置かれていて、本児は座卓の所に筆者を導いてくれた。真向かいに座ったら緊張するだろうと思って90度横に座った。

本児の日々の生活や家族の事、学校や友人のことなどを一通り聞いた。ご飯は食べているが、カップ麺ばかりで、たまに弁当を買って来てくれるそうで、食べ盛り、成長期の本児にとっては栄養バランスが良くない。父親の食事も同じようなもので、虐待と言うほどではない。父親は毎晩お酒を飲むようで、酔うとあまり良い父親ではなく、本児に対して暴言を吐くそうで、本児はそれが嫌だと訴えていた。父親は仕事が長続きしない様で、経済的にも大変で、制服やジャージが小さくなっていたり、破れたりしても買い替えてもらう余裕はないこと、教材なども十分揃えてもらえず、酒代に消えてしまうこともあって、学校に行けなくなってしまったこと、学校に行きたいと思っていたが、もう最近では、勉強にもついて行けないだろうからどうでも良くなったと話してくれた。小学校時代からの友達はいて、時々遊びに来てくれるので、一緒に出掛けたりはするが、お金がないので食べたり飲んだり出来ないから、公園で少ししゃべったりして帰って来ると言っていた。

こんなに話してもらえとは思わなかったが、聞いたことに素直に答えてくれるので、これだけのことを聞き取れた。来年は修学旅行もある。行きたいか聞くと、行きたいとは思うがと。やはりお金のことが引っかかっているのだろう。でもそれは就学援助を受ければ何とかなる。その点については父親と話して行くことにして、他に困っていることはないか聞いてみると、後は特にないと。制服やジャージについては長を直せないか、ジャージは学校に聞いてみて、貸してもらえないか聞いてみるし、就学援助を受けることで何とかなる物もあるかもしれないのでと伝えて、その結果の報告と、父親とその話をする上で又来ることを伝えて

失礼した。本児との関係を作ることはできたので、次回の約束も取れた。本児も筆者が是が非でも学校に引っ張っていくわけではないと知り、少し元気になって、最後は少し笑顔も見えた。

生活困窮家庭で不登校になるケースは時々ある。父親が酒乱でお金がない、家が荒れているというケースもちょくちょく出会う。これを虐待で扱うのは中々難しい。DVがあるとか、子どもに暴力をふるうとか、食事を与えないとか、暴言が酷いとか。確かに暴言はあるが、ご飯が与えられていないわけではない。それでもお酒を飲んで暴言を吐くということで、一応当時の児童相談所の福祉司に情報提供をしていた。

学校とも連携をとって、事情を理解してもらい、父親とも面談をして就学援助を受けられるようにし、学校の担任の努力もあって、少しずつ学校にも行けるようになっていた。父親に対しては生活保護受給の相談に繋いだ。順調に進んでいたのが相談もその後何回か面会したのち終了とした。生活保護が受給されるまでには審査があり、時間が少しかかる。その間の生活費は、保証人さえ立てられれば、社会福祉協議会で借りることもできる。その話は生活保護の方でお願いしていた。ところが年が明けた1月末ごろのこと、父親が灯油を盗んで捕まった。お金がなかったために、近所の灯油タンクから抜き取ったのだ。冬の北海道では1月は一番寒い時期である。灯油が無かったら生きることさえ難しくなりかねない。生きる為とは言え、馬鹿なことをした。本児一人で暮らせるわけもないので、直ぐに一時保護をして、その後父親と児童相談所とも話し合い、本児は施設活用となった。1年ちょっとで中学を卒業する。高校も施設から通える。生活を立て直せるまで父親は一人で暮らすこととなり、結局その後、本児は高校卒業まで施設活用となった。父親は、そ

の後執行猶予付きで釈放され生活保護受給となったが、体調不良が続いたようでしばらくして自死した。

まとめ

不登校ケースでは中々関われなくて、時間ばかりが経っていくことが多い。何回かの訪問で本人に会えるのはまれであり、その後の面談を続けられることも難しい。本ケースでは、本児が苦しい生活をしてきたこともあって、介入した際に助けてとSOSを出すことが出来た。タイミングが良かったと言えるだろう。父親自身も困っていたことが介入を受け入れることに繋がった。この介入は、金銭的な問題を一部解決することに繋がったので、父親が受け入れやすかったことにもなる。今振り返ってみると、父親自身も精神的に参っていたのではと思われる。そこにまで気を配れなかったことが悔やまれる。

いつも思うのだが、支援、介入はタイミングの問題がある。焦って介入しようとしても中々

上手く行かないが、タイミングが良いとすんなり入れる。こればかりは、運かもしれない。

本児を父親から放し、守ることはできた。学校も変り、学校に通うことも出来た。施設では兄弟のような存在も出来た。

しかし、大きな家族を得ても、彼の心が十分癒えたとは言えないかもしれない。本児にとっての父親はこの父親一人である。どんな虐待ケースでもそれは同じで、どんなに酷い親でも、親なのである。だからと言って、殴られたり蹴られたりして良いわけではない。そして、そういう親子と言う一番守られるべき関係性の中で傷つけられた子どもは、その傷をしっかりと癒さないと、或いは信頼でき、守ってくれる大人との関係が築けないと、虐待の連鎖になってしまうことがある。そうならない為にも、子どもを親から離さねばならないし、再統合にも最善の注意を払わねばならない。

このケースでは父親が残念な結果になったが、本児はその後施設と学校で頑張り、自信を持って強く元気に巣立っていくことが出来たのが、我々支援者にとっての希望となった。